

■留意点

1. 香織と彩加の関係がどんなものが想像しておく必要があります。香織は博士課程の院生ですが、まだ Ph.D の候補者ではなさそうです。彩加はポスドクで、論文投稿においては先達で、香織の学問的助言者である可能性があります。
2. データの公表や処理の透明性においては、彩加の香織に対する社会的地位の相対的高さにより、彩加はデータの処理や扱い方に対して、もうすこし誠実であるべきです。
3. 著者である米国科学アカデミーによると、著名な *Journal of Cell Biology* で投稿された論文の 1/4 (25%!!!) に、なんと、作図に不適切な操作をしている可能性があるとして指摘しています (2002 年) 大きな情報の操作は、それ自体でヤバイことなので、誰しものが不正行為をするわけではありませんが、軽微な操作ならよいと考えるのは、研究者の 3 つの公理の「研究者間の信頼」を裏切る行為になるということです。
4. 結果を予言する新しい理論 (質問課題の 3. で示唆されています) は、それが指し示すものの学問的評価次第ですが、大変魅力的ですが、その傍証のためには、沢山の時間的および経済的コストが必要になると思われます。「まあ、いいか!」ということが一番危険な発想です。
5. 授業の中で指摘しましたが、ラボノート (Laboratory notebook) というのが、このような軽微な不正行為を防ぐ可能性があり、彼女たちの研究上の先取権なども保証してくれる可能性があります。実験系の研究者で、もしご存じない方は、自分の研究成果に科学的信頼性を与え、かつ、特許などの利益の保全のためにも、ただしく、よいラボノートを記述する方法と習慣を身につけておくことが重要です。
6. 最後に論文の共著になることと、今般のような「データの扱いに関する意見の不一致」の解消法は、それぞれの手続きに、法的な問題がクリアしているのであれば、共同研究をどのように考え、どのように進展させていくのかについての、研究者の属する分野や文化によって多様な解釈が生じる可能性があります。チームワークを重んじる日本では、なるべくそれぞれの相違を乗り越えて共著が勧められるでしょう。他方、論理の組み方の独自性やオリジナリティをまず優先する西欧とりわけ米国の文化的土壌では、意見の相違を議論と論理によって統一するほうが優先されるでしょう。
7. 授業のなかでは、このような議論のほかに、論文の先取権の問題 (日本や多くの国では先願主義 [first to file and first to invent] ですが、米国では先発明主義 [first to invent system] がとられることに、ラボノートの有用性など) や、特許にまつわる利益の配分や、日本とアメリカの違いなどについて興味深い議論が展開しました。

■米国科学アカデミー編『科学者をめざす君たちへ』池内了訳、化学同人、2010 年 (On Being a Scientist: A Guide to Responsible Conduct in Research: Third Edition)

<https://www.nap.edu/catalog/12192/on-being-a-scientist-a-guide-to-responsible-conduct-in>



■より深く勉強する人のために：研究倫理入門

http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/101214R_Ethics.html